

広瀬川文化講座

実施概要



初春の広瀬川七ツ石

平成 24 年 3 月
広瀬川市民会議

会の大橋信彦氏から、被災地のいきものについて、自然の生命力に関する感動的なエピソードの紹介がありました。

ここに改めて、講師の皆様にご感謝申し上げますとともに、記録としてまとめることで多くの市民の皆さまにこの取り組みを知っていただき、今後の活動の発展につなげていきたいと考えております。

市民と共に広瀬川の魅力を求めて

広瀬川市民会議
会長 工藤秀也

広瀬川市民会議は、平成 16 年 4 月の発足以来、市民の皆さんが川に親しむイベントや広瀬川の環境問題・利活用に関する勉強会など様々な事業を実施してきました。平成 23 年度からは、「広瀬川文化講座」を企画し、より身近な話題で市民の皆さんと交流が図れるよう、様々な分野の講師を招き、あらゆる角度から広瀬川へのアプローチをスタートしました。

第 1 回は「広瀬川と市民の暮らし」をテーマに、西大立目祥子氏を、第 2 回は「広瀬川と魚たち」をテーマに高取知男氏を講師に招き、広瀬川に関する話題提供をしていただき、ご参加いただいた皆さんとのディスカッションを行いました。広瀬川と市民のかかわりの歴史的な変貌を知ることが出来、皆さんにとっても大変興味深いものであったと思っております。

そして第 3 回は予定していた内容を変更し、未曾有の被害をもたらした東日本大震災をテーマにしたフォーラムを開催することになりました。私たちは広瀬川での活動を通じて、人々が自然から多くの命の育みや恵みを享受しながらも、人間の力の及ばない自然災害が発生するということを頭では理解しておりました。しかし、現実の社会では自然を征服する勢いで産業を発展させ街をつくり、生活の利便性や豊かさを求め続けてきました。そして、歴史的な地震災害の教訓さえも忘れ去ったとき、3.11 大震災は発生しました。

私達は今度こそ、この地震津波の教訓を後世に伝えなければならないという決意から、同じ広瀬川をフィールドに活動している広瀬川 1 万人プロジェクト実行委員会との共催で、震災の記憶～巨大津波とどう向き合うか～を開催しました。

フォーラムでは基調講演に、リアス・アーク美術館学芸員の山内宏泰氏に「地域文化と津波 津波災害の文化的位置づけと教育の在り方について」と題して講演して頂きました。明治三陸地震津波から学び、津波被害を減災するには津波教育が重要であるという、大変示唆の多い内容の講演でした。事例報告では、広瀬川 1 万人プロジェクト実行委員会の会員である、深松組(株)深松努氏、仙台環境開発(株)渡辺晋二氏より、災害地復旧のために「ガレキ処理」について報告を頂きました。そして、名取ハマボウフウの

開催一覧

開催日 会場	講師	タイトル	頁
平成 23 年 7 月 29 日 エルパーク	西大立目祥子さん フリーライター	「広瀬川と市民の暮らし」	3
平成 23 年 10 月 14 日 市民活動サポートセンター	高取知男さん 仙台市科学館	「広瀬川と魚たち」	5
平成 24 年 2 月 3 日 KKR ホテル	山内宏泰さん リアス・アーク美術館学芸員	地域文化と津波」 ～ 津波災害の文化的位置づけ と教育の在り方について～	9
	深松努さん 株式会社深松組代表取締役社長	「仙台市災害復旧の現状と課題」	10
	渡邊晋二さん 仙台環境開発株式会社代表取締役社長	「東日本大震災におけるがれき 処理の現状と課題」	11
	大橋信彦さん 名取ハマボウフウの会会長	「よみがえる閑上のいきものたち」	12
資料集			13

「広瀬川と市民の暮らし」

フリーライター 西大立目祥子さん

未曾有の震災から復興を目指すには、都市やまちが歴史的な時間をどう積み上げてきたか、それをもう一度ふりかえったり、確かめたりしなければ先には進めないのではないかと、今感じています。

広瀬川ホームページの原稿を7-8年前に書き始めたとき、私はどちらかと言うと人文的な人の暮らしとか生活という面で人の話を聞いたりしながら取材してきましたし、自分自身、川で遊んだ記憶も少ないし、魚を捕った記憶もあまりなかったので、広瀬川のことが書けるか不安の中でお引き受けしました。

広瀬川の記憶。それは、市民一人ひとりが抱いている広瀬川の思い出だと思います。そうした記憶がとても大事なのだ、とこの仕事を通して痛感してきました。

仙台という都市は1601年に城下町として築かれ410年以上経ちますが、そのはるか以前から、ススキが生い茂り、あちこちに湧き水がわくような原野を、川は蛇行しながら流れていました。山と丘陵と河岸段丘の面を、どこに町を作ろうかと伊達政宗が見渡してまちづくりを始め、400年という時間が刻まれ今に至っています。都市の宿命として人工的なものが次々と生まれ、江戸から明治に変わったときには、洋館が立ち、東北線が開通し蒸気機関車が煙を上げて走るようになりますが、そうした都市の蓄積は1945年7月10日未明の空襲で失われてしまいました。この震災で被害を受けた沿岸部は1611年の慶長の津波で被害を受けたところですが、苦勞して開墾された水田はまた水没してしまいました。でも、川は同じように流れている。とても不思議な感じがしますが、広瀬川こそが私たちの暮らしを映し出す変わらない存在として、もっと身近に感じるものであることを強く感じるようになりました。



講師の西大立目さん

仙台市公会堂はとてもモダンな建物で、私自身も子どもの頃に眺めたおぼろげな記憶があります。早稲田大学の武基雄さんという建築家がコンペで選ばれて建てました。終戦からわずか5年後の事で、名誉市民の土井晚翠さんや志賀潔さんらが記念行事に招かれたという記録が残っています。

戦後の文化活動はここ公会堂からスタートしたといっても過言ではありません。都市デザイナーの大村虔一先生も東北大学に通う際に、フランスの建築家コルビジエを思わせる建築にワクワクしたとおっしゃっていました。復興の勢いがどれだけ目覚ましかったか、この一枚の写真が物語っていると思います。



昭和30年代の仙台と広瀬川

今はもう見ることはできませんが、天文台は戦火のあと昭和 30 年に西公園に作られました。加藤 4 兄弟の加藤愛雄先生が、子ども達が粗末な望遠鏡を使って天体観測しているのは忍びないと 10 円カンパをはじめて、建設費の半分を集めました。はるか 50 年前に市民協働でこのような事が行われたことに驚かされます。現在、天文台長の土佐誠先生は、中学校を休んで天文学会に出席したのが縁で、東京から仙台まで一人旅でやってきて、一ヶ月天文台に寝泊まりして天体観測をしたそうです。そしてその 5 年後、東北大学理学部に入学して天文学を専攻され、のちに東北大学の教授になりました。先生によると、仙台市天文台は日本中のアマチュア天文ファンのあこがれだったそうです。

公会堂や天文台、広瀬川のほとりで戦後の文化的な取り組みが行われてきました。公会堂はピロティから広瀬川が見下ろせるデザインになっていたのも、お客さんはきっとお芝居の前後に広瀬川を眺めたことと思います。



西公園にあった頃の仙台市天文台

今回の震災、津波被害あと気がかりがありました。数年前に取材した、藤塚の渡辺理一郎さんと奥さんのもよ子さんご夫婦です。

取材のときは、理一郎さんに昭和 45 年に撮影された渡しの写真を見てもらったのですが、すぐに「俺の母ちゃんがうつってっかもしんねえぞ」といわれました。写真を持ってかえって見てもらい、後日ご自宅に伺うと、「私だっちゃ」と、もよ子さんが待ち受けていました。ご本人もびっくりしたようでした。

毎日、栽培した野菜を積んで閑上に渡し、売ったお金を貯めて、お姑さんに見つからないようにブラウスを買ったりしたこともあったそうです。

このようなこともあり、若林区に電話で問い合わせたところ、藤塚の人たちの避難場所を教えてもらって尋ね、お二人と再会できました。

沿岸部にお住まいだった方々は、仮設住宅などで、新しい生活を始められていますが、かつてこの地域はどういう場所であったか、そのなかでどういう生活をしていたかをもう一度丁寧に振り返ることで、これからの生活が始まると考えています。

仙台市の街場にいると沿岸部の被災地の様子が見えませんが、ともすれば忘れがちです。そういったとき、川は上流と下流を結ぶ・つなく、ものだと言うことを改めて感じるようになりました。

宮沢橋のわずか 5km 先には津波に流された集落があります。川の持つ役割・記憶をもう一度振り返ること、川の線としての地域のつながりを、自分たちの想像力の中にくり込むことで藤塚のことを忘れないでいられるのではないかと。広瀬川の風景のむこうに藤塚があることをいつも思い出せるような気がします。



藤塚の渡りがあった頃

「広瀬川と魚たち」

仙台市科学館 高取知男さん

大学生時代に、魚類調査で3年間広瀬川に来ました。その頃は、多摩川上流の秋川ほとりに住んでいて、目の前が川遊びと釣りポイントでした。秋川の盛期は、竿を振る場所がないほどなので、広瀬川を初めて見て広いなと思いました。東京は、ヤマメやイワナが釣れる場所が少なく、イワナは2カ所位です。広瀬川では、イワナを何匹も釣ることができ、ヤマメを一日で20尾釣り、翌日に20尾釣ったことがあります。

シマヨシノボリはハゼの仲間で、広瀬川でよく見ることができます。私が一番好きな魚です。眼が水色で、ほほに赤い筋があり、ともとても綺麗です。産卵期のは、お腹がラピスラズリのような綺麗な青色になります。

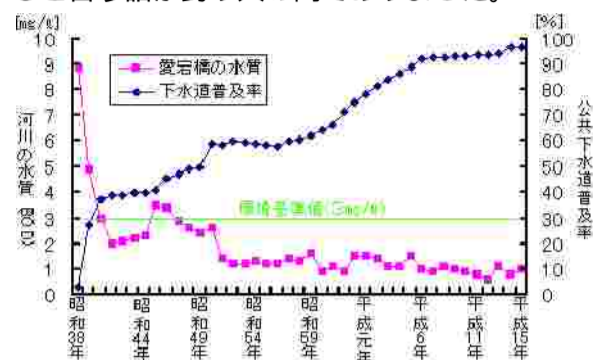


ハゼ科のシマヨシノボリ

愛宕橋付近は、水質測定点になっています。昭和38年頃は、BODが9ppmで魚が住めない数値ですが、その後に仙台市が下水道整備を始め、普及率が高くなるにつれて水質が良くなりました。広瀬川的环境基準値であるBOD3は、アユが一番住みやすい水質を目標として設定されたものです。

広瀬川で最初に魚類調査をした昭和49年頃は、BOD3前後でした。それでも、愛宕橋付近のアユが臭くて食べられないこととか、青葉山

付近から上流になるとアユを食べることができると言う話が釣り人の間でありました。



広瀬川の水質と下水道の普及率

愛宕堰の魚道は勾配が緩やかで、名取川の赤石付近の魚道も緩いです。しかし、他の古い魚道は、1/7位の急な勾配です。土地柄もあって、昔からサケが上れば良いと考えたようですが、アユを上らせるにはもっと緩い方が良いです。愛宕堰は、魚道を通る水が少なく、入口で迷う魚が多かったです。六郷・七郷地区にかんがい用水を取るための堰ですが、余分にとった水を魚道よりも下流側で広瀬川に戻しているのが原因でした。しかし、魚道の姿形が良いので好きです。

広瀬川本流よりも、支流の大倉川は流程が長く、二次支流の横川も長いです。広瀬川は、大きな支流が上流域にあり、中流域の支流が少ないです。熊ヶ根付近から上が上流域、熊ヶ根から愛宕大橋までが中流域、愛宕大橋付近から下が下流域です。

カジカは、いくつかタイプがあります。カジカ大卵型は、卵が大粒で、生まれる仔魚が大きいので、海に下らなくても成長できます。源流から中流域に分布しますが、広瀬川の牛越橋になると見られません。いつもいるのはもう少し上の郷六付近までです。カジカ大卵型は、南三陸地域の小さな川の上流にもいます。

以前に、ウツセミカジカと呼んでいたのがカジカ小卵型です。大卵型と同様に石の裏面に卵塊を産み付けます。カジカ小卵型は、小さく生まれた仔魚が海へ流れ下り、少し大きくなってから再び川に帰ってくる回遊魚です。カジカ小卵型がいるのは、三陸地域の中小河川の下流です。これを、名取川の東北本線鉄橋付近で3匹採りました。下流に住むカジカ小卵型も、大卵型と同じ良好な水質環境を求めるので、小卵型がいたのは、当時良好な水質環境だったと言えます。

希少種エゾウグイがいるのは、宮城県で2か所だけです。広瀬川支流の青下川と、阿武隈川支流の白石川上流に生息しています。初めて見たとき、県内にいないと思っていたので、アブラハヤと思って逃がしました。帰り車の中でもしかと思い、戻って採集したらエゾウグイでした。アブラハヤとは目つきが似ています。幼魚のアルコールやホルマリン標本では見分けが難しいので、尻びれの位置を調べます。尻びれ前縁が背びれ後端の前方にあるのがアブラハヤです。ウグイとの見分けは、尾びれの付け根に、ひらがなのくの字形にメラニン色素沈着があるのがウグイです。

マルタは大きなウグイの意味から、オオウグイ オオガイになり、これが仙台付近の方言です。マルタは、4月から5月に川に産卵に戻って来ます。婚姻色のアカハラの時期の追い星がウグイと比べて細かいです。追い星は、オイカワなどに見られますが、浅瀬で穴を掘る際に体に守るためのものです。

広瀬川に沢山いるのは、少し前までウグイでした。広瀬川は、とても中流が長く、中流の代表的な魚としてのウグイが相対的に多いのですが、絶対量が減りました。それより以前は、オイカワが非常に多かったです。ウグイは、食べ物でアユと競合しません。オイカワは、平瀬の藻をついばむのでアユと競合します。そのため、オイカワが増えるとアユが育たないので漁業協

同組合の人たちがオイカワ退治をした時期がありました。そんなに多かったオイカワがウグイと入れ替わった理由は、水質の改善があげられます。オイカワは、少し汚れた水BOD3が住みやすいのが、ウグイがより住み易いきれいな水BOD2がそれ以下になったからです。

現在は、ウグイが減って、アブラハヤが目立ちます。緩やかな場所の魚ですが、平瀬まで出てきています。水質に敏感なウグイと違い、アブラハヤは水温が低ければ水がきれいでも汚れていても住めてしまいます。



講師の高取知男さん

久しぶりにアユ釣りをしました。思いがけずウグイを沢山見かけました。でも、本来の川は、魚が踏んづけるくらいいなければならないものです。ギバチは、広瀬川ではとても多くて普通の魚に見えます。しかし隣の山形県ではほとんど減んでいます。

水質の改善とか、浮き石の減少など、ウグイなどの魚の減少につながっている様に思います。石の裏側まで使える石が減ったのは、洪水の減少に関係しているはずですが、その他にも原因があるはずなので、皆さんも見つけてほしいと思います。

「地域文化と津波」～津波災害の文化的位置づけと教育の在り方について～

リアス・アーク美術館学芸員 山内宏泰さん

震災により妻と車以外流されてしまいました。勤務するリアス・アーク美術館の関係者でも親族を亡くした方がいます。美術館は23年度中、休館することが決まっています。

地震発生から一時間もしないうちに、気仙沼の街から白煙が立ち上りました。津波襲来によって家屋が倒壊し、そのチリが100m程の高さまで舞い上がっていたのです。その後、湾内にあふれ出した重油とがれきによる火災までもが発生し、繰り返し押し寄せる津波によって、見る間に拡大していきました。

地震発生から二日後の3月13日。残してきたウサギのモモを助けたくて自宅に戻りましたが、鉄骨四階建てのビルは根こそぎ流されており、願いは叶いませんでした。その後、市内の被災状況を記録に残すため、各所を歩きました。津波でマンホールが開たうえ、濁りで地面が見えないので、杖をつきながら歩きました。湾に面した文化財級の建物は全滅。大型船が打ち上げられ、建物の三階部分までがれきが積み上がっていました。3月28日には、偶然にも我が家を見つけることができとてもうれしかったですが、天地、東西は反転し、1~2階部分は失われ鉄骨のみの状態でした。



津波によって流された山内さんの自宅

流出した魚は腐り悪臭を放ち、クマバチのように肥えて飛び方も下手なハエが、桜吹雪のように舞飛び顔にぶつかってきます。集積所には

がれきが10m以上も積み上げられ、気仙沼市のゴミの100年分とも言われています。川沿いの小学校ではプールががれきで一杯になっていました。人が楽しんでいた場所がこのような状況になると、より悲しみがあふれてきます。6月7日、気仙沼魚市場の水揚げが再開されましたが、同日の唐桑は全くの手つかず状態でした。



講師の山内宏泰さん

明治29年明治三陸大津波、昭和8年昭和三陸大津波、昭和35年チリ地震津波、平成22年チリ地震津波、平成23年3月9日宮城県沖地震、そして3月11日東日本大震災。津波は頻繁に起こっていますが、多くの方は百年に一度や千年に一度と思い込んでいます。

明治三陸地震津波を報道画家が記録した風俗画報「大海嘯被害録」を見る限り、今回の状況と何ら変わりありません。そこには、家屋を破壊し人畜を流亡する絵や沿岸に死体が漂着する絵、遺族が泣きながら溺死者を引き取りにくる絵、町医者が負傷者の手当をする絵などが記されていますが、これらの記録が私たち現代人の目に触れることはほとんどありませんでした。明治維新後の国家大変貌期であり、廃藩置県による地域概念の崩壊や隣国との戦争と重なり、国力低下のイメージを払拭するため「それでも倒れない大和魂」を強調したことで、国内史上最大の

津波被害は忘れられていったのだと考えられません。

昭和8年の津波は、完全な軍事国家となり太平洋戦争、第二次世界大戦へと突き進む最中でした。民間ボランティアの支援により復旧・復興が行われましたが、思想的集団活動と見なされ国家の弾圧を受けたといえます。

このように、明治29年、昭和8年の津波に関しては、「東北での出来事」「国家レベルでは無い」という扱いから、教科書等に載ることはありませんでした。そして昭和35年に、田老町の防潮堤がチリ地震津波をはね除けたことで、「防潮堤さえあれば大丈夫」「日本は津波災害を完全に乗り越えた」と無秩序に防潮堤が建設され、チリ地震津波が日本人に最も知られることになりました。

被災地には、津波を警戒する碑が多くありましたが、ほとんどが無視される存在となっており、先人の知的財産が今回の震災に生かされるケースはごく僅かでした。



津波によって倒された過去の津波を警告する碑

津波災害から人命を救えるか否かは、恒久的な「津波文化教育」にかかっています。

以前、リアス・アーク美術館において三陸地震津波に関する特別展示を行いました。27、122名（明治29年当時気象庁発表数）という死者を単なる数字として表したくなかったため、紙人形を作成し並べました。背面には黒い紙を使って津波を表現し、その高さは津波の最高遡上高

を表しました。4千人の入場を見込んでいましたが、来場者は1,200人にとどまり、学校の利用はわずかに1校だけという状況でした。津波に対する住民意識があまりにも低すぎると感じ「砂の城」を出版しました。

今では津波発生のメカニズムは中学生くらいであれば理解しているでしょう。いわば津波襲来は必然であり、単なる自然現象ではなく社会現象とも言えます。地域文化を論じる上で、津波は重要な文化的要素と捉えなければならず、雪国で雪を無視した生活は成り立たないように、三陸では津波は防ぐものではなく、受け入れて共生するものなのです。



三陸地震津波の被害者と津波を模型で表現



熱心に講演を聞く参加者

「地域文化」とは展示ケースに入れて鑑賞するものではなく、掘り起こしたものを使える状態にし、日常生活の中で使い続け、進化させていくものであります。過去の津波、東日本大震災の記録、経験、記憶を、単なる歴史遺物とせず、生活の一部、地域文化として進化させていくことが今後の課題です。そして地域を保つ上で、大きな責任を負っているものが教育です。しっかりととりまとめた教科書があれば、継続的な総合学習に取り組むことは不可能ではありません。発表などを通して保護者等にも伝えることが可能であることから、津波災害の減災に、このような教科書の作成は不可欠です。

表現まで行わないと、内には残りません。三陸でこのような事例が作れば、全国に波及し、減災に結びつくものと信じています。



山内さんが出版した<砂の城>

「仙台市災害復旧の現状と課題」

株式会社深松組代表取締役社長 深松努さん

地震が発生した3月11日は東京にいました。大江戸線がある地下50mでしたが、とても地下とは思えない程の揺れを感じました。仙台建設業協会災害対策本部の隊長という役職にあるため、すぐにでも戻らなければなりませんでしたが、交通・情報ともに寸断され、テレビに映し出された閉上の状況を見て、これは大変なことが起きたとただ漠然としました。つてをたどって足を確保しましたが、途中、福島で原発事故があり、引き返そうとする運転手に何とか頼み込み、13日の朝5時過ぎに仙台にたどり着きました。



復旧活動の状況を説明する深松努さん

建設業協会では、11日の18時から道路の復旧作業を行い、自衛隊が入れるようにしました。最前線での作業だったため、ご遺体も多く、皆泣きながらの作業を連日行いました。東部道路より東側は、携帯電話の基地局が破壊されたため電波が届かず、通信手段として伝令を走らせ情報のやりとりを行いました。

バックホーを動かすのに一日に1本のドラム缶が必要なので、燃料の確保にも困りましたが、復旧作業ということで優先的にもらうことができました。しかし、一般客からのクレームも多かったため、早朝にスタンドに行くなどの苦勞もありました。

3月下旬まではご遺体の搜索が主な作業になりました。自衛隊は重機のオペレーションが不得意なので、建設業協会が操作を担当しました。

仙台市内の被災地のがれき撤去は12月で完了しました。なぜ、余所よりも早く完了したかということ、沿岸部に広い仮置き場を確保できたからです。そして、各区の道路課・公園課・本庁の農林土木課といった部署で分かれていた管理を環境局に一本化しよう働きかけたことで、作業の効率化とがれきの分別を図ることができました。気仙沼などは、仮置き場の面積が小さかったため、全部一緒に集めざるを得ない状況だったので、火災も発生しましたが、我々の現場ではそれはありませんでした。

がれき撤去の現場に20～30歳代の作業員はいません。すべて40歳以上の世代です。この地震が5年後に起こっていたならば、きっと今回のような対応はできなかつたでしょう。問題を挙げればきりがありませんが、普段の3倍の作業量をこなさなければならぬため、うつ病も増えています。

仙台市では復旧はおおむねスムーズにはかどりました。次は復興に向けて一つずつ課題をクリアしていきたいと思えます。津波がくるまでに一時間ありました。津波があっても誰一人亡くならないようにすることは可能です。そんな仙台にできるようがんばります。

「東日本大震災におけるがれき処理の現状と課題」

仙台環境開発株式会社代表取締役社長 渡邊晋二さん

東日本大震災により発生したがれきの推定量についてはマスコミ等で報道されていますが、東北3県:2,260万t、宮城県内:1,590万t、内仙台市内:135万tです。宮城県は東北3県のがれきの70%を占めており、当社が処理に関わっている仙台市内のがれき量は、宮城県内のがれき量の1割弱となっています。



平野部に広い土地を確保したことで処理が進んだ

宮城県では仙台市以外は処理が進んでいません。ではなぜ仙台市が早かったのか。私は、責任と権限が仙台市にあり、それをこなすスタッフがいるからだと感じています。災害廃棄物は一般廃棄物で、一般廃棄物は各市町村の責任で処理するという決まりがあります。現在、市町村が県に委託し県がゼネコンに委託するという図式で宮城県は進み始めましたが、この仕組みで本当にスピード感を持って進めることができるのでしょうか。例えば、処理先を見つける責任はゼネコンにあるのでしょうか、ゼネコンが見つけれなければその責任をゼネコンに押し付けるだけでよいのでしょうか。また、見つかったとしても価格が合わなければどうするのでしょうか。仮置き場での選別作業は重機と人で行う作業なので建設現場と同じです。したがって、本来、重層下請を認めるべきです。なぜならその方が効率的だからです。しかし、一般廃棄物処理の場合再委託禁止という決まりがあり重層下請は認められません。これだけの規模の事業に対して、ピラミッド型の組織を作らずに

統率できるのでしょうか。そもそも、1000年に1度という大災害に遭遇してもこのようなルールに縛られなければならないのでしょうか。膨大な廃棄物量をこなすにはどうしても県外の力が必要です。当社にも県外民間企業から協力に関する話が来ています。私たちはそのような協力依頼に「よろしく頼む」と言いたいところですが、どうしても「放射能は大丈夫ですか」という会話になります。県外の多くの企業は協力する意思はあるのですが、その地域の住民に説明するのは非常に難しいのが実態です。

環境省はリサイクル物の放射能基準を100Bq/kg以下と決めました。100Bq/kgは完成品に含まれる放射能です。例えば1000Bq/kgの木くずを10%混入した木製品は100Bq/kgなのでOKということになります。とはいえ、この管理をだれがどのように責任を持って行うのでしょうか。

このように放射能に対する対応が明確にならないと現場でどのように対応すべきかわからないのです。

現在進行形にある東日本大震災の復興に向けた取り組みについて随時課題を整理し後世の糧にする必要があります。特に今回、私たちはがれき処理に立ち向かっていますが、一度に大量の廃棄物が発生した場合の受け皿の確保が極めて重要であると感じています。特に最終処分先の確保は痛切です。今後、東南海地震等が予測されていますが、このような準備は国家や企業の危機管理の重要な要素であると考えます。

「よみがえる関上のいきものたち」
名取ハマボウフウの会会長 大橋信彦さん

津波によって関上の自宅は流出し、海岸のハマボウフウ保護区も壊滅したかと思われました。しかし4月上旬、保護区の中にハマボウフウの新芽を発見することができたのです。その様子はテレビで放映され、“復興のシンボル”として多くの人に希望を与えたようでした。また、臨空公園に近いハマボウフウ栽培畑でも、彼らはがれきの中から元気に顔を覗かせておりました。

6月には、北は北海道から南は静岡まで、全国の海岸で活動する市民団体が集まり、名取で「ふるさと海辺フォーラム」を開催しました。甚大な被害を受けた中でのフォーラムでしたが、多くの仲間に出会って、「これまで私たちが育ててきたのはハマボウフウだけではなく、集まってくださったネットワークの皆さんとの絆であった」ことを実感しました。

7月には、広瀬川1万人プロジェクトのメンバーでもある情報労連から100名の方々にはハマボウフウ栽培畑の整備に来ていただき、畑は見違えるようにきれいになりました。



連携団体ががれきの除去を支援

また、環境学習林として活用してきた「ゆりりん」の松林もほとんどが倒壊しましたが、生き残った松の中には元気な松かさを付けているものがありました。それを京都で天橋立の保全活動を行っている市民団体に送り、苗作りをしてもらっています。早ければ、二年後には名取の松

を再び海岸に植えることができます。

一方、私が仮住まいをしている内陸部のアパートのそばを流れる増田川には、荒海を越えてサケが遡上してきました。その姿を見て、「魚たちは自分たちの命をつなぐ営みを、これからもずっと続けていくのだなあ…」と改めて感じたことでした。



名取川の支流増田川にもサケが遡上してきた

2月19日、名取市で“自然と文化を活かした震災復興”をテーマに市民講座を開きます。

いま、私たちが切に願うことは、私たちの日々の暮らしを支えてきた自然や文化を大切にしたい暮らしの営みを、一日も早く復興させることです。

広瀬川と市民の暮らし

400年にわたって、仙台のまちと暮らしを支えてきた広瀬川。川のほとりに暮らし続けてきた人々のことばの中に、川と人との深いかわりをさぐり、これからの広瀬川を考えていきます。



日時：7月29日(金)
18時30分～21時
(開場18時)

場所：エルパーク5階
セミナー室

仙台市青葉区一番町4-1-1(4)ビル
仙台三越ビル5階 022-268-4200

○アクセス：
地下鉄：市営地下鉄仙台公園駅下車
バス：商工会議所前、または
定禅寺前市役所前下車

○参加費：500円(飲み物つき)

*定員：先着30名
FAXかメールにて、
お申し込みください。

講師：西大立目祥子

○講師プロフィール

1956年仙台市生まれ。宮城学院女子大卒。フリーライター。宮城県内を中心に、住民による地域づくりや雑誌づくりにかかわる。「地元学」の視点で仙台市内のまち歩きを続けてきた。

2006年、市民有志で「まち遺産ネット仙台」を結成、歴史建造物の保存活動に取り組んでいる。著書に「仙台とっておき散歩道」、共著に「写真帖 仙台の記憶」「寄り道・道草 仙台まち歩き」



主催／広瀬川市民会議・仙台市 後援／広瀬川創生プラン策定推進協議会
連絡先 仙台市青葉区一番町4丁目1-3 仙台市市民活動サポートセンター1C159
TEL022-214-5512 FAX022-268-4042
Email:hirosegawa_shiminkai@yahoo.co.jp

第2回市民交流サロン

『広瀬川と魚たち』

日時：10月14日(金)

18時～20時(開場30分前)

*定員：先着30名
(メール、FAXにてお申し込み下さい)



講師：高取知男

東京府出身。幼少期を多摩川上流で過ごす。元仙台市役所職員
現任：仙台市学館 社会教育指導員

講師より：

「40年前から、広瀬川の魚を眺めています。殖えた魚や減った魚など、環境の変化に寄り添っているいろいろな魚がいます。最近、仙台ふきんの魚がとでも減っていて気がかりにしています。」

場所：仙台市市民活動サポートセンター 4階研修室

仙台市青葉区一番町西丁目1-3

TEL 022-212-3010

○アクセス地下鉄広瀬通駅 西5番出口すぐ又は、市営バス「商工会議所前」徒歩3分



主催／広瀬川市民会議・仙台市 後援／広瀬川創生プラン策定推進協議会
連絡先 仙台市青葉区一番町4丁目1-3 仙台市市民活動サポートセンター1C159
TEL022-214-5512 FAX022-268-4042 Email:hirosegawa_shiminkai@yahoo.co.jp

震災の記憶

〜巨大津波とどう向き合うか〜

平成24年2月3日（金）15時〜18時
KKRホテル仙台 2階蔵王

第一部 講演

「地域文化と津波」

～津波災害の文化的位置づけと教育の在り方について～

山内 宏泰 氏(リアス・アーク美術館学芸員 学芸係長)



第二部 報告



「仙台市災害復旧の現状と課題」
深松 努 氏(株式会社深松組社長)



「ガレキ処理の現状と課題」
渡辺 晋二 氏(仙台環境開発株式会社社長)



「よみがえる閑上のいきものたち」
大橋 信彦 氏(名取ハマホウワウの会会長)



津波の教訓次代に

仙台で がれき処理など議論 フォーラム

東日本大震災で得た教訓や課題を次代に生かそうと、フォーラム「震災の記憶〜巨大津波とどう向き合うか〜」が3日、青葉区のKKRホテル仙台で開かれた。広瀬川の環境保全に取り組む市民団体「広瀬川1万人プロジェクト」実行委員会が主催し、市民

津波への教育の在り方を見いだす必要性が指摘されたフォーラム

や行政、建設業の関係者ら約40人が集まった。書籍などを通して津波への備えを訴えてきた「アス・アーク美術館」(仙台市)の山内安寿孝芸係長が、「地域文化と津波」と題して講演。1896年に三陸沿岸を襲った明治三陸大津波などの教訓が生かされなかった事実を指摘し、恒久的な津波文化教育の必要性を強調した。

仙台市のがれき処理について、実行委員で建設業「深松組」の深松勇社長は、「広大な仮置場を確保し、行政の窓口を一本化してもらった結果、作業はスムーズに進んだ」と説明。廃棄物処理会「仙台環境開発」の渡辺晋二社長は「処理コストの管理、下請け企業への委託規制の緩和など、課題は多い」と訴えた。

名取市の自然保護団体「名取ハマホウフウの会」の大橋信彦代表も、「よみがえる浜上の生きもの」をテーマに講演した。

東日本大震災のがれき処理が、県外受け入れ問題などにより難航している中、仙台市の処理は、「仙台モデル」と評されるほど、順調に推移している。こうした中、井土地区処理場の管理・運営を担当している仙台環境開発の渡邊三二社長が3日、同市内で講演し「写真、他自治体におけるが



れき処理の課題について指摘するとともに、今後の円滑な業務推進に向けて提言した。渡邊社長は、同社が大震災発生2日後から仙台市の依頼を受け、市内数カ所に震災家

「仙台モデル」を紹介

がれき処理で講演

仙台環境開発社長 渡邊三二

庭ごみ仮置き場を設置し、管理運営を行ったことや、沿岸部の3地区に設置されたがれき仮置き場（計100カ所）の整備に携わったことなどを紹介。がれき処理については、

ばりサイクルは、業者と取り引きするには一定の品質が求められるが、限られたスペースの中で高い精度の分別は難しい。焼却するがれきも選別の精度が低ければ、大量の燃

また、廃棄物処理にかかわる法律上の問題にも言及し、「がれきは一般廃棄物だが、われわれが通常扱えるのは塵

「がれきは一般廃棄物だが、われわれが通常扱えるのは塵」



建設通信新聞

2012年(平成24年)1月17日(火曜日)

減災へ情報共有

仙台で来月3日シンポ 広瀬川実行委

東日本大震災で得た教訓や課題を次世代に生かそうと、広瀬川の環境保全に取り組む仙台市の市民団体「広瀬川1方プロジェクト実行委員会」などが、シンポジウムを開催する。未曾有の被害をもたらした自然災害の脅威を踏まえ、減災や持続可能な地域づくりを考える場を多くの市民と共有したいと企画した。

シンポジウムは、1月3日、青森県のD&Rホテル仙台を会場に開催する。「震災の記憶―巨大津波とどう向き合うか―」をタイトルに、2部構成のプログラムを組んだ。

専門家、建設業者、自然保護団体… 歴史、課題など説明

第1部は、著書などを通して津波への備えを訴えてきたアス・アーク美術館(愛知市)の山内宏泰学芸部長が「地域文化と津波」と題し、津波災害の歴史を振り返りながら、その文化的位置付けと教育の在り方について解説する。

第2部は、仙台市の災害復旧、がれき処理の現状と課題について、実行委員会委員で建設会社「深松組」の深松賢社長、廃物処理会社「仙台環境開発」の渡辺晋二社長が報告。名取市の自然保護団体「安取ハマボウフウの会」の大橋信彦代表が、「よみがえる陸上のいきものたち」をテーマに現地の状況を説明する。

工務所も実行委員長は「震災の教訓を、居住の在り方や経済活動を含むさまざまな分野に生かさないといけない。自然とどう向き合うべきなのか、被災していない人も交えて考えたい」と話している。

午後3時開始で定員は130人。参加無料。27日までに申し込み(先着)。571。

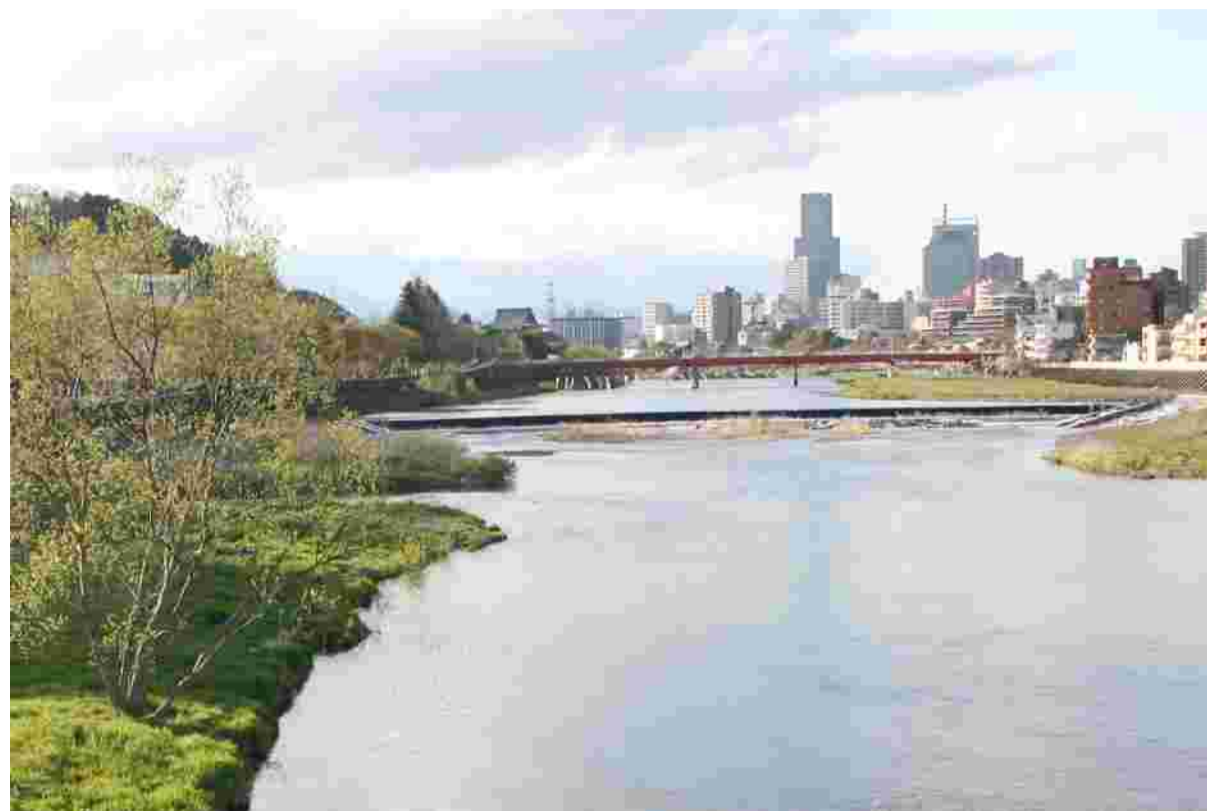
シンポジウムの進行について協議する実行委のメンバー



シンポジウムの進行について協議する実行委のメンバー

厚。終了後、交流会(参加費3000円)も予定している。

連絡先は、実行委事務局



芽吹き始めた河原の草木

この事業は、仙台市のシンボルである広瀬川の環境の保全と新たな魅力の創出を図るため策定された「広瀬川創生プラン」に基づき、河川への関心を喚起し、プランの理念を広く共有するための事業として、平成23年度重点事業の認定を受けて実施しています。

企画・編集 広瀬川市民会議

〒989-3434 仙台市青葉区新川字佐手山 5-124

TEL080-7004-4932 Email:hirosegawa_shiminkaigi@yahoo.co.jp

URL <http://hirosegawa-shiminkaigi.jimdo.com/>